



「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財百選」に 「祝島の神舞と石積み集落」が選ばれました。

全国の漁村に残る歴史的・文化的に価値の高い施設や貴重な工法・様式の施設などを水産庁が認定する「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財百選」に、「祝島の神舞と石積み集落」が選ばれました。2月22日に東京で行われた「第3回オーライ！ニッポン全国大会」での授与式には、上関町役場の担当課長さんが出席し、中川農林水産大臣から認定証が直接授与されました。（大臣からの直接授与は全国で5ヶ所だけです。）祝島は昨年の「むらの伝統文化顕彰受賞」の大臣顕彰に続いて2年連続で大臣から直接の受賞となりました。



授与式の様子

選定理由は、「伝統ある神事の継承および急峻な地形の中で、強風と火事から家を守るための島独特の工夫。石積み（練り壁）は造形的にも美しく、住民により大切に保存されている。」とのこと。これからも、この素晴らしい伝統を守り続けたいものです。



神舞神事



石積み集落

新しい権伝馬が完成！ 船名は「祝島」です。



きれいに化粧も終えて完成です！

前号でも紹介しましたが、昨年からの製作中だった新しい権伝馬が完成しました。船名は、皆さんからの応募作品を審査した結果、「祝島」と決まりました。

5月5日に船おろし（進水式）が行われます。踊り子も乗り込んで海上パレード、そして餅まきもあります。お楽しみに！

目次

| | |
|------------------|----|
| 未来に残したい漁村百選 | 1 |
| 新しい権伝馬が完成！ | 1 |
| 祝島の歴史を探る | 2 |
| 祝島観光パンフレット | 3 |
| 魚・さかな・肴 | 4 |
| 花*花クイズ | 4 |
| 会員リレーコラム | 5 |
| 祝島懐かしの料理 | 6 |
| イギリスだより | 7 |
| 瀬戸内カヤック横断隊 | 8 |
| 祝島の遺跡 | 9 |
| お花見ツアー報告 | 10 |
| 祝島不老長寿パズル | 11 |
| お知らせ / 読者 / 編集後記 | 12 |



島ネコ物語 絵・しげむらみちこ

4月、今年もまた新入生を迎える季節となりました。みなさんの職場の新入生はいかがですか。私も建築関係の仲間内では近頃、社会人としての気構えのない若者がふえたということをよく耳にします。学生の延長で 仕事は教えてもらうもの、与えられるものだという意識で会社にきている人が多いようです。特に建築業界は技術は盗みとるものというような古い体質がいまだに残っている世界ですので、彼らのような意識ではとうてい長続きしません。

いまだきの新入生は自分で調べる前に人に聞き、ネットでさらっと情報を得、物事の表層だけをとりえて、理解した気になる。そして本来、家庭や社会から学ぶべき常識や道徳を知らない人がふえてきたように思います。自分の立場をわきまえず、上司やクライアントが何を望むか、他人のことには興味がない、おいおいこんなことは子供のときに親からしつけられることだろうと嫁姑の戦いのようになる、なんともむなし気持だけが残り上司を落ち込ます新入生達(すいません、愚痴です)。

そんな新人達には祝島女性の仕事ぶりや立ち振る舞いを見習ってほしいと思います。彼女達はお茶くみが自分の仕事じゃないなんてことは絶対言いません。役職についても入社当時と変わらず皆が出社する2時間前には会社にきて仕事の割り振りからお茶の準備をし、社内レクレーションには手作りの弁当まで用意するR女。会社で初めて総合職にと言われたY女は、誰も気がついていないけど入社以来20数年間社内で使う雑巾を縫い続けていました。(が、最近彼女は会社を退職してしまったので、社の人達はいつもあった雑巾の存在にやっと気がついたことでしょう。) T女の勤務する施設を事務所の所長と見学させてもらった時、待合せ場所に現れた彼女は「一応土産やゆうて施設の人に渡して。もらいもんじゃえけえ気にせんといて。」と紙袋を差し出しました。初対面の所長は大笑いしながら「さすが祝島人！こういう気配りはほんまに祝島の人に共通しているんやなあ。どういう育ち方をしたらこうなるんや。」と半ばあきれ顔で言いました。もちろんこちらがお願いして案内してもらうのですから土産は用意しています。しかし、さらにその上をいくこのT女の気配りは一朝一夕にできるのもで

はありません。彼女達の基本的な生活態度は祝島女性に共通するもので、母親のきびしいしつけを忠実に受け継いでいます。さらにきびしい島のおばちゃんたちに鍛え上げられた結果が磨きをかけて健全な女性を育ててきたのでしょう。彼女達の立ち振る舞いは島の生活環境、風土の中に内在する祝島独特の文化そのものではないでしょうか。

私がこのコラムをひきうけた理由のひとつは、こういう個性的な女性を作り上げてきた祝島の伝統を見直し、その伝統を受け継いだ祝島女性のたくましさを見なさんに知って欲しかったからです。島の歴史はいろいろなところで紹介されていますが、あえて女性をテーマにされることはありません。しかし、家や子を守ってきたのは女であり、伝統的なものを子に受け継いできたのは母親です。この母としての努力が健全な祝島女性の気質を形成してきたのだと思います。昔は公の場に出ることが少なく、発言の場が与えられることもなかった女性ですが、自分が守るべきものへの執着は強く、そのたくまさが家族を支え、社会の秩序を維持し、伝統を守ってきたのだと思います。ここで紹介した彼女達の勤勉さと会社に対する影日向のない誠実な姿勢は島の人達の生きかたそのものであり、祝島の歴史をになってきたとても大きな要因のような気がします。

今回は祝島女性の特色のひとつである「器量良し？」について考えてみたいと思います。もちろん「器量良し」とは外見のみをいうのではなく、気働ききまわりの良さというものも含んでいます。

吉川英治歴史文庫「新・平家物語」十三巻に源義経が載頼軍の援軍のため上関に寄航するくだりがあります。

*ここの南の沖に祝島という小島がございます。
万葉の歌人がくちずさみでもございましょうか。
ことにめでたい古歌に振りをつけたのが土地の鄙歌に
残っております。
それをばひとさしご覧下されましよう。とふたりの遊
女を立たせて舞わせた。
遊女のひとりはこちら歌った。
旅まくら 旅ゆく人を祝ひじま*

幾夜ふるまで 祝ひ来にけむ
すともうひとりの遊女が、舞いつつまた、
岩だたみ 祝ひ島なる岩つつじ
咲くよと名のれ やまほととぎす
「・・・おもしろい。旅の子には、よい饞別」
義経はこだわりなく、興じ顔だった。

この踊りを見て義経は静御前のことを思うわけです。
同じように故出田政次氏の残した「郷土の口説」には以下のように書かれています。

・・・源氏平家の戦いの時に
室津上ノ関海峡御通過の時に
御宿に在りし範頼卿に 宿の亭主の申也し言葉
此処より西五里隔れた沖に 祝島なる小島が在りて
乙女達ち皆々踊が上手 島の娘にや美人が多く
御覧成さるも一つの興と 今の踊子尚々上手・・・

はたしてどこまで信憑性があるものかわかりませんが、あのへんこな出田のおじさんまで、こういうふう
に褒めているのです。千年の昔から「島の女性は美し

い」という評判があったのかも知れません。事実、子供の頃に柳井や上関の人から（器量の悪い人間にとってはつらい言葉ではありましたが）「祝島は美人が多いね」とよく言われました。これも内面からでる器量が表れていた証拠なのかもしれませんね。

ここまで読んで今の話に何のつながりがあるのかと思われた皆さん、すみません。これ以上書いていると仕事ごとどこおり連休に帰れなくなるので、おおいおい解き明かしていくことにします。源平の戦いについては、いずれまた橋部さんにお聞きして、まとめる機会がありましよう。

それにしてもこんなに器量良しばかり、なんでみんな嫁に行けんのでしょうか。それが最大の謎かも・・・。



（協力：古文書解読 吉村満江、井上美登里）

新しい「祝島観光パンフレット」が出来ました

上関町が制作した新しい「祝島観光パンフレット」が出来ました。祝島全島マップ・集落マップ・交通アクセス情報など、祝島の観光に役立つ情報満載です。このパンフレットの制作には、当会の会員も協力しました。会員の重村通子さんのイラストも使われています。全体の構成・デザインは、会報「いわいしま通信」のタイトル文字もデザインしてくれた、上関在住のイラストレータ松浦伸一さんが担当されました。なかなか良いものが出来たと思います。

尚、このパンフレットは、定期船「いわい」の中や、上関・室津の定期船待合室、祝島の宿泊施設、上関町内の観光施設などで無料配布されていますので、ぜひ手にとってご覧ください。



表紙



全島マップ



集落マップ

タコは普通、蛸壺でとりますが、タコ掛けでもとれます。私の親戚の綿村で手作りのタコ掛けの道具が出てきました。高校生の頃、祖父と櫓で漕ぐ漁船(りょうせん)で、人家の沖に出て掛けていました。ヤマ(幹糸)は「ジンドウ」と呼ぶ柿の渋を塗った糸でした。出てきた道具はその頃作ったものでしょう。

おととしの夏、息子とその道具で掛けに出ました。人家の沖で息子の方に1つ掛かりました。餌はアジです。

タコは、ゆでダコにして調理するのが一般的だと思います。酢味噌で食べたり、キュウリやワカメと一緒に酢であえたりします。タコのフライはまた旨いです。干しダコにもします。なかなか乾きにくいです。真夏の陽射しが良いようです。干しダコは焼いて食べ



タコ掛けの道具

ますが、焼いた干しダコを紙でくるんで金槌でたたくとやわらかくなり、それを薄く切ります。昔はしていなかったと思いますが、この頃は皮をむいて刺身でも食べます。

子供の頃は、磯に行っておととしの夏、息子とその道具で掛けに出ました。人家の沖で息子の方に1つ掛かりました。餌はアジです。岩の陰で流木に火をつけて、焼いて塩水で洗って食べるタコは格別の味でした。



掛かったタコ



干しダコ

<連載> 花*花クイズ(16)



前回の花・花クイズの答えはウバユリでした。

花の咲く頃、茎の下の葉が落ちてしまいます。花を主家の子に見立て、その子が成人して花となる頃、世話した乳母(うば)(めのと)が老いて歯が無くなることから名付けられたと「牧野植物図鑑」には書いてあります。

祝島では昔から雌株から良質の澱粉を取ってカタクリ粉と言っています。そして花をつけるのは雄株と。種を残すのは普通雌株の役なのに、雄株が担う?そして雌雄異株なのだろうか?ある人に聞いてみました。

発芽した年は根塊は大豆粒くらいで、年々次第に大きくなり、5~6年目くらい経つと、茎が伸びて花芽をつける。そして花咲き、やがて秋には朔果となり種が地上に蒔かれる。もう一つ増え方がある。花がおわり茎が枯れた時、3~5片の小さな根塊が残ってい

て、それが次春になって芽を出してきます。

つまり増え方は二つありますが、球根が大きくなって花が咲くようです。植物分類上雌雄株はなく、雌雄を使い分けている祝島の人々の真意は分かりません。

ウバユリは夏を過ぎると葉が枯れ、翌春芽を出し大きくなりこれを繰り返します。そして球根が大きくなった頃に採集して、澱粉を取り出します。祝島は適地で成長が早く群生するようです。だから大量に取れるようです。雑木林を切ったあとの草地には、ウバユリが一斉に芽を出します。何年も眠っていたのが日光を浴びて驚いたのかもしれない。たっぴり腐葉土を含んだ豊穡の土地の恵みだったのでしょう。最近、山林を切り開く事が無くなりました。道端の球根は痩せています。このウバユリは全国に分布していますから、この鱗茎を食用にしている所があると思います。



朔果

5月には「ユリ（祝島ではウバユリとはいいません）の口開け」があります。貴重な資源を守ってきた先人の知恵が今も続いています。なお、澱粉（片栗粉）については、会報第9号に詳しく掲載されています。

さて、今回の花は？

秋の実をよく知っていると思いますが、花は案外知られていないかな？！



これは何の花？

会員リレーコラム(17) ~ 佐藤 謙二さん ~

このコーナーは「祝島ネット21」の会員の皆さんに、自己紹介を兼ねて簡単なコラムを書いていただくコーナーです。第17回目は、お父さんが、あの「ことしお」の乗組員だったという佐藤謙二さんの登場です。



ネット21会員の皆様、はじめまして。本紙初顔見せとなります。私は現在、広島県呉市在住で佐藤謙二と申します。

冒頭、はじめましてとは記しましたが、私は祝島出身で、ネット21副会長の國弘君と同級生です。会員の中にも数名同級生がいます。祝島には、小学校5年生まで住んでいました。住んでいたのは西方（にしがた）の15区で、お店をやっていました。私の父親は、当時連絡船の「ことしお」の乗組員でした。（「佐藤のひんでえ」と言ったら、昔の人はわかると思いますが・・・）

祝島を出て、あれから30年余りになりますが、高校の時以来帰省しておりませんので、祝島のことは全

くわかりませんでした。しかし、今ではこの「ネット21」「漁協HP」「橋部さんのフォト」を見れば、自宅に居ながらにして祝島の移り変わり等が手に取る様にわかる上に24時間見れ、便利な世の中になったなと関心しています。

話は変わって、私の職場には「室津」出身の人がいます。私より2つ年上で兄と同学年で、当時家の近所によく遊びに来ていたそうです。多分、幼年時代にどこかで会っていると思います。世の中は、本当に狭いと思つづく思いました。彼は、母校の室津小学校が廃校になった事にあまり関心を持っていませんでした。（卒業生なのに・・・）

比較の意味では祝島の人々は愛郷心が強いんだなと実感します。反原発活動で結束が強いのかも・・・。皆様の職場には、同郷の人がいませんか？ 案外近くにいるかもしれませんよ！！

それでは、皆様、今後も「ネット21」の躍進に努力し、互いに盛り上げていきましょう！！



定期船「ことしお」 懐かしい・・・

<連載> 『聞いてみん菜・食べてみん菜』

祝島懐かしの料理(13)

～ 國弘さんちの「梅干」～

祝島・食べてみ隊

今回は、昨年のマラソン大会の給水所でランナーの皆さんに提供されて大好評だった、國弘さんちの梅干の作り方を教えていただきました。

<材料と分量>

梅：黄色になりかけたものがよい。黒い斑点のある物などは除く。

塩：梅の20%（梅1kgに対して塩200g）

赤じそ

<作り方>

梅を一晩水につけてあくを取る。

分量の塩を梅全体によくまぶして容器に漬け込み、梅の重さの3倍程度の重石を置く。

水が上がってくる（これが梅酢）が、土用干しをするまで重石をそのまま置いておく。

赤じその葉っぱをむしって塩でよくもむ。しそをよく絞って、もみ汁は捨てる。

でてきた梅酢を別の容器に取り、その中に赤じその葉っぱをひたしておく。

三日三晩の土用干し。

土用のよく晴れた日を選んで、の梅を広げ、三日三晩かけて干し上げる。注意：雨に当てないこと。雨が降り出したら家の中に入れる。シソは干さない。

本漬け

干し上がった梅と赤じそを交互に漬け込み、その中に梅酢も入れて軽く重石をしておく。



これまで何度か、本などを参考にして、焼酎飲みの同居人のために、塩分控え目の梅干を漬けてきました。ところが、いつもカビが生えたり、またある時は皮が固かったりと、失敗ばかり。

そんな中、去年のマラソン大会で國弘さんちの梅干を初めて口にして、そのまるやかさに感激！ これぞ日本の梅干！と、早速作り方を教えていただいたのですが、目からウロコが落ちる思いでした。あの味で20%の塩なんて信じられないくらいです。おまけに作り方もとてもシンプルで、これなら私でも失敗せずにできるかしらと、6月になるのを首を伸ばして待っているところです。



一方で我が実家の梅干、別の意味でやっぱりこれぞ梅干！！というくらいすっぱ～～～いッ。そのため、何かわからないくらい真っ白に砂糖をかけて食べるという、いやはや何ともおとろしい話・・・。



そんなこんなの"マイ梅干"にトライしてみませんか？

<新連載> イギリスだより ~ 第一話 カルチャーショック ~ 川口 あすか

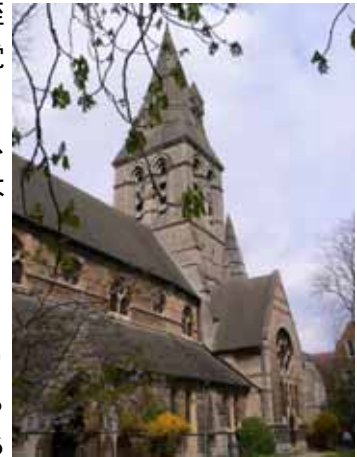
今回から祝島ネット21イギリス支部?のマーティンさんと、奥さんのあすかさんにイギリスからのレポートを送ってもらうことにしました。どうぞお楽しみ下さい。

わたしの出身は上関。祝島には中学校の英語教諭として3年間生活していました。その後の2年間はアメリカのシアトルで過ごし、今年の1月から結婚を機にイギリスのオックスフォードで生活を始めました。実はわたしの夫は以前祝島中学校で一緒に英語を教えたことのあるマーティンさんです。彼は現在オックスフォード大学で日本の歴史を勉強中です。

イギリスで生活し始めて約2ヶ月。気持ち的には既に半年分の時間は流れています。ゆっくりカルチャー・ショックを経験する暇もなくいつの間にかイギリス生活に馴染んでいると言いたいところですが、やはり新しい国に住むともなればそれは避けては通れないものです。そこで「イギリスだより」第一話のお題は、海外で生活したことがある人なら誰でも経験したことがあるでしょうカルチャー・ショックについて書くことにしました。

最初に意識したカルチャー・ショックはイギリスの持つその独特な雰囲気でした。冒頭でお話したように、夫の仕事の関係上、現在わたしはオックスフォードの街に住んでいます。オックスフォードの街と言えば、イギリスでは昔から名門大学が集う伝統的な街として知られています。街の至るところに中世に建てられた古い大学の建物がごろごろしています。その様は何とも言えないほど堂々たるものです。最初の二日間ぐらいは「さすが歴史のある国は違うね～」なんて観光客気分が街を歩いていましたが、一週間もすると何か言葉では上手く表現できない複雑な気持ちを感じ始めるようになりました。2月のイギリスはとかく雨も多く、街を歩くのも億劫になります。そのせいで気分も滅入るのだろうと思っていたのですが、どうやらそれだけが原因ではないらしい。そこにはもっと他に威圧感を持った何かが存在しているような感じがするのです。一体全体この感覚は何だろう?今までに経験したことのない妙なカルチャー・ショック。シアトルの生活には存在しなかった奇妙な感覚。

表現するまでに至らないその妙な感覚を引き摺ったまま、わたしのオックスフォードでの生活は目が回るほど忙しくなっていました。しかし、忙しい日々にもふと立ち止まり静かに物事を考える時間は大切です。あ



る日、そんな気持ちで古い建物に吸い込まれるように街へと足を伸ばしました。そのときのわたしはあの妙な感覚の原因を突き止めるかのように、ときたまゆっくりと辺りの建物を見上げながら歩いています。「これだ!」明らかにそれはここから感じるのです。何百年の月日を隔てて今だこうして存在している建物の醸し出す雰囲気。これこそわたしにあの妙な感覚を抱かせていたものの正体だったのです。「建物が歴史を語る」。それはわたしにはあまりにも威圧的で、重圧感を感じるものでした。夫や彼の友人にこの話をすると、少し驚いた感じで「That's really interesting!」と繰り返していました。

イギリスではオックスフォードのような街に限らず、あらゆるところに何百年物の建物が点在しています。それらはただ古いというだけではなく、そこで生活していた人々の歴史を刻んでいます。500年前に住んでいた人々の声や足音を昨日のこのように思い出しながら、それらの建物はその物語を語り続けているのです。少しオカルト風に聞こえるかもしれませんが、これはわたしがオックスフォードに来て初めて意識した奇妙なカルチャー・ショックなのです。



<連載> 第三次瀬戸内カヤック横断隊レポート 「いざ！イワイ・シマ」

～ 第二話 自然の洗礼 ～

松村 文彦

結局、2日間の臨時講習を受けただけで俺は冬の瀬戸内海に挑んだ。この生半可な気構えが、後々までとぐるのようにしっぺ返しとしてつきまどってくる。横断隊前日に起きた、フェリーに荷物だけを運ばれて肝心な身体が置いて行かれるという、嘘の様なホントの話が、今考えれば可愛い話になってしまうと言うから、俺の横断隊がいかにかシビアなものだったかということに察しがつくであろう。

横断隊一日目はまぶしいくらいの朝日の中を出発した。まるで今回の横断の前途を照らしてくれているかのように。一抹の不安こそあれど、「気力と体力で漕げる」とアドバイスをもらっていた私にとって、その言葉の存在がとてつもなく安心感を与えてくれた。しかし、このときの俺は「体力」に対する解釈が間違っていたことを知る由もなかったが。

初っ端から漕いでも漕いでも遅れてしまう。最初は「みんな筋力あるんだなあ」なんて思っていたが、その予想は距離稼ぐたびに浅はかな勘違いということに気付く。腕力に任せて漕いでいた俺は、途中で自分の漕ぎ方にかなりのロスがあることに気が始めたのだ。なぜなら、俺のようにガツガツピッチだけを上げて漕ぐ人は1人もおらず、みなクールな顔をして漕いでいるではないか！！そうか、俺は既に漕ぎ方からして横断隊レベルではなかったのか！！ここで不安が増大した。みんなに迷惑がかかるんじゃないか。俺のペースに配慮してもらってれば祝島に着けないのではないか。出発してすぐに私の心は自己嫌悪感で一杯になった。けれども、一度漕ぐと決めたからには、みんなに謝ることは出来ない。謝るくらいだったら初めから参加しなけりゃいい。そんな気持ちを抱いていたため、私の情けない漕ぎを遠くで待って下さった他の隊員の方々には、すみません、ではなく、「ありがとうございます。」という言葉が自然と出てきた。これも横断隊なのかな、と感じた瞬間だ。心は泣き崩れていた。しかし、顔は笑っていた。スポーツ（野球）をやってきた私にとって、精神的に追い詰められた場面ほど笑顔が必要、という感覚が身についていたからだと思う。

2日目、とうとう笑えなくなった。ピンチは笑って乗り切るという対処法が出来ないほど、精神的に追い詰められてきたのだ。出だしのラダー故障（故障と言っても知識があれば自分で治せた程度だったのであるが・・・）がその日の全てを物語っていた。遅れてみんなに迷惑をかけてはいけない、と思えば思うほど迷惑をかけてしまっているのだ。後から考えると、祝島に向かって1週間漕ぐという自分の信念を貫き通すことだけに頭の全てがあったときだと思う。待ってもらおうのが情けない、引っ張ってもらおうのが情けない、俺のペースに合わせてもらうのが情けない。海の上で起きていること全てが自己否定感に変わってきていた。でも、ここで弱音を吐くと当初の自分の信念が揺らいでしまう。ハッキリでも良い。弱音は吐かない！そう心に決めていた。しかし、海と言うものは正直だ。弱音を吐かないようにすればするほど、みんなに迷惑を掛けていた。理想のフォームも教えてもらった。おそらく今までの横断隊でフォームを教わりながら漕ぐと言うのは始めてだったであろう。しかし、そんなフォームも長続きしない。フォームを気にしながら漕いでいるとあっと言う間に遅れてしまう。しかたなく、今までの腕力に頼るフォームに変えてしまった。わかり易く言うと短距離走のペースでそのままマラソンを走るといった感じである。みんなはひょうひょうと、俺はガツガツと・・・なんて不器用なヤツなんだろう。

< 第3話につづく >



いよいよ出発！

遺跡や史跡の調査・研究をされている祝島支所長の安田さんに、祝島の大遠地区の遺跡に関する解説を書いていただきました。祝島の古代文明？の謎に想いを馳せてみましょう。

(1) 磐境 (いわさか) とは

磐境 (いわさか) の文字がみえるのは『日本書紀』第2に「天津磐境を起したて」というのが最初である。

磐境とは、社殿に神を祭る以前の風習としておこなわれ、山の山頂または尾根の比較的平らな場所につくられ、中央に大きめの岩石を置き、周りは小さめの岩石を等しい間隔をおいて円状に並べたもので、祭祀をおこなった跡をいう。

磐座 (いわくら) は、岩石の一部が地上にあらわれ、そのあらわれた部分を神あるいは神の座とみなしたもので、磐境と磐座は別のものと考えられている。



この石の刻みの意味するものは？

(2) 祝島で確認した磐境

近年、柳井市文化財保護審議委員会会長・松岡睦彦氏を中心に、有志が祝島・大遠地区を調査、磐境を確認した。

祝島で確認した磐境は、島の東南の山頂近くの尾根上に位置し、徒歩約2時間の距離にある。磐境の規模は、東西10m、南北9mの円形状の石積み中央に3m四方の四隅を岩石で囲んだ形に作られたもので、年代は不明、ここで祭祀をおこなったであろうと考えられる。

ここでも磐境の中央の岩石のそばに山桜の木が生えている。桜は神のいる場所をいい、「さ」は神、「くら」は座をあらわすという。古くから中央の岩石を神座として祭祀に用いたと考えられることから、これは自然に生えたものではなく、人工的に植えられたものであろうと思われる。



磐境と思われる場所の確認調査

(3) 祝島で確認した積石塚群

磐境に至る尾根の斜面には年代不明の積石塚群がある。

積石塚の規模は平均して約2m～3m余と思われる。(内1基測定・・・東西3.2m、南北3mで、円錐形状に石が積まれている。石は扁平石を使用し、底辺面に大きめの石を配している。扁平石の最小石の寸法は縦7cm×横7cm×高さ4cm、最大石は縦45cm×

横55cm×高さ15cmである。)

何の目的で作られたものかは定かでない。誰かの墓か供養のためなのか、それとも別の目的なのか、それは後の調査に期待したい。

島民の間では、すぐ近くが芋畑だったことから、芋畑を作るとき出土した石を積み上げたものと思われるが、積石塚は底辺に大きめの石が多く使われ、上部にいくほど小さめの石が多いことから、少なくとも出土した順に任せて石を積んだと考えるには少し無理があるように思われる。もし、畑作りを主にして、出土に任せ積んでいったのであれば、大きさにはバラつきができ、積み方も一定の形状を保ちながら積むのは困難だと考えられる。

「春爛漫お花見ツアー」報告

國弘 秀人

「万葉の島・祝島 春爛漫お花見ツアー」と銘打って、4月2日（日）にお花見ツアーを実施しました。定期船「いわい」をチャーターして島を一周しながら海上から山桜を眺め、その後、北野地区まで山登りをするという、初めての企画でした。当日は、島内や島外から、大人44人、子供9人の合計53人が参加してくれました。

3月末に季節はずれの寒波があり、桜の開花が遅くなったため、まだ桜の花は少なめでしたが、それでも長磯あたりには山桜がたくさん咲いていて、すばらしい景観でした。何よりも船でビールを飲みながら、いい景色を眺め、すばらしい仲間と語り合うのはとても楽しいひと時でした。船内放送による橋部さんの観光ガイドも大好評でした。島の裏側を一度見てみたい、と参加してくれた島のおばさんたちも「う～ら！よかったのや！」と満足してくれたようです。



「いわい」から山桜を眺める



普段見られない島の裏側の景観に興味津々



お楽しみのお弁当タイム

島を周って船を降りると、ちょうど雷が鳴りだし、今にも雨が降り出しそうになりましたので、予定を変更して公民館でお弁当タイム。ここでもまたビールで一杯やりながら話に花が咲きました。参加者の自己紹介や、木村先生のギターで歌を歌っているうちに雨も上がりました。

いよいよ北野までの山登り。飲んだ後に急な段々を登りましたので、最初はみんなハアハア言っていました(^_^)、登りが緩やか

になると、それぞれマイペースで、山桜を初めとしたいろんな植物を観察したり、眼下に見下ろす瀬戸内海の風景を楽しみながらのんびり歩き、皆さん無事に北野の貯め池まで登りました。

参加者の皆さん、ありがとうございました。また来年もやりたいですね！



観光ガイド役の橋部さん



北野に向かう途中 山桜の下で



北野の貯め池に到着！

読者の声

歴史特集は楽しみに読ませてもらっています。祝島の「家」のことや「屋号」のことも、とてもよく分かりました。私が疑問に思うのは、あの小さな島でどうしてこんなに多くの「名字」があるのだろうか？ということ。大抵の田舎では同じ名字の家が多いのに、何故祝島は違った名字ばかりなのか、ぜひ調べて記事にしてください。

どんな方がメンバーなのか会員紹介でよくわかり、「今回は？」と封を開けるのが楽しみです。

毎回楽しみにしています。会社から帰って晩酌しながら読んでいます。至極の瞬間です。
(ンな、大層な・・・)

お知らせ & 募集

第5回祝島不老長寿マラソン開催のお知らせ

恒例となりました夏のイベント、「祝島不老長寿マラソン」を下記の要領にて開催いたします。ランナーとして、大会ボランティアとして、皆様のご参加をお待ちしています。特に、お近くの方はお友達をお誘い合せの上、ぜひご協力をお願いします。



昨年の大会の様子

【開催日時】2006年8月6日(日)
AM8:00スタート

【種目・参加費】13kmの部(3000円)、2kmの部(2000円)

【参加賞】大会オリジナルTシャツ、祝島特産品等

【募集人数】約100名

【参加募集期間】5月15日～7月14日(必着)

詳しくは下記の大会ホームページをご覧ください。

「祝島不老長寿マラソン」ホームページ

<http://www.iwaishima.jp/marathon/>

ボランティアの応募はいつでも受け付けます。
ご連絡は国弘(携帯090-8069-5066)まで。



編集後記

皆さんこんにちは。爽やかな新緑の季節になりました。会報も今回からページ数が12ページに増加し、新しい連載や新しいコーナーも始まりました。印刷も今までのジェルジェットプリンタからレーザープリンタにグレードアップして、写真も今までより鮮明になりました。(代わりに印刷費は高くなりましたが・・・(～;))

さて、春のイベントとして初めて開催したお花見ツアー、天気はイマイチでしたが、なかなか盛況でした。この企画の言い出しっぺの岸本智恵美さんも、わざわざ奈良から帰ってきて一緒に楽しみました。皆さんもぜひ「言い出しっぺ」になって、いろんな企画を考えて実行に移してみませんか？ 祝島ネット21がバックアップしますよ。

パズルコーナーでは、最近私がはまっているモノトーンパズルの祝島版を作ってみました。ちょっと難しいかもしれませんが、ぜひ挑戦してみてください。みんなで祝島ネタで楽しみましょう。(じつは、会報の原稿作りや編集にはとても長い時間がかかるのに、読むのはわりと短時間なので、ちょっと悔しい(^_^;)思いをしていたのです。これで今までより長い時間、会報を楽しめるでしょう・・・)「読者の声」コーナーも作りましたので、会報の感想をぜひお寄せください。 次回の会報は7月発行の予定です。お楽しみに。
(編集長：国弘秀人)

事務局では会員の皆さんからの投稿をお待ちしております。ご意見・ご感想・身近な情報など、お気軽に投稿してください。
祝島ネット21では随時会員を募集しています。
入会ご希望の方は事務局までご連絡ください。

《発行》 祝島ネット21事務局
〒742-1401 山口県熊毛郡上関町祝島
ホームページ <http://www.iwaishima.jp/inet21/>



久しぶりに真方先生が島にいられました